

観天 望気

日本の農地が拓く未来

山形県庄内平野の南東にそびえる月山の麓に、月山高原牧場という広大な農地が広がっています。民有地と公有地を開墾したこの農地には、400畝の畑地と田んぼがあります。そのうち100畝の土地は、本来ならダムを作り、水田にする予定でした。しかし1970年代当時は米の生産過剰を受け、新規開田が禁止された時期で、結局、この土地は1ブロック60^アの畑になり、タバコ、アスパラガス、枝豆が栽培されるようになりました。ところが、タバコの生産調整などにより、それもほとんど使われなくなりました。耕作放棄地の出現です。

そんななか、農業委員から「ボランテアで使われなくなった畑の草刈りをしてくれないだろうか」と頼まれました。雑木が生えた畑を刈り取ると、ほとんどの場所から枝豆の畝跡が出てきました。数年前は枝豆を一生懸命植えていたのでしょうか。

この畑で育てるのに何か有効な作物はないかと考え、私は2020年から小麦栽培に取り組んでいます。

国内消費される小麦の85%を輸入に頼る日本では、輸入小麦を政府が買い付け製粉会社に売り渡す仕組みですが、日本に食糧危機が忍び寄り、大幅な円安のさなか、海外からの安定的な穀物の入手は困難になります。そこで取引先に石臼製粉の専用工場を山形県内に作ってもらい、小麦の生産から製粉・保管・販売までを担う新規事業を立ち上げました。ラーメン、パスタ、パン、ベーグル、麦切などに使われていますが、国産小麦の消費拡大に向け、さらに販売活動を強化したいと思っています。

20年先を見据えると、耕作放棄地で、輸入に頼る小麦や大豆などの農産物を生産することが、今求められていると考えます。それが日本の農業が歩む道の一つであり、地域の特色を生かしながらその取り組みを広げていくことで、日本の農地に活路を見出すことができるのではないのでしょうか。



齋藤 一志
日本農業法人協会 会長

さいとう かずし
1957年山形県生まれ。株式会社埼玉種畜牧場の研修生を経て、76年父が経営する大口農事組合法人に就農。90年有限会社いずみ農産。2003年株式会社庄内こめ工房。09年株式会社まいすたあを設立、代表取締役就任。10年山形県農業法人協会会長、17年日本農業法人協会副会長を経て、23年6月より現職。